追悼文

竹内清秀名誉会員を偲ぶ

去る2月下旬，竹内清秀名誉会員の訃報が届いた．同月17日に会合出席の予定をたてておられたが，突然病魔の冒すところとなり，なくなられた．昨年来，現役の頃と変わらぬご活躍の様子に接していたので，愛惜の思いを禁じえない．故人の永年にわたる多くの業績を偲びつつ，追悼の一文を差し上げたい．

故人は1947年9月，東京帝国大学理学部物理学科を卒業して気象庁の前身である中央気象台に奉職され，測器課が行う気象風洞と標準気圧計の管理運用の職務につかれた．気象界における第一歩は，この気象観測の基盤となる装置の運用と研究であった．38年間の気象庁勤務は，技術行政の実務と管理，また研究など多方面におよび，気象研究所長を勤めて後，定年を迎えられた．その後，財団法人日本気象協会で常務理事として活躍をつづけられた．

かつて昭和の大戦中，日本は学術情報において孤立した状況にあった．大戦後，氏は自ら有志に呼びかけ，大気境界層の乱流について諸外国の学術論文講読の勉強会を始められた．会のレベルは最新の乱流論に劣るところのない高いものであったのだろう．後にアメリカ気象局の大気資源研究所に逗留をされたとき，自ら拡散実験を行い，また米国が行った大規模野外拡散実験の資料を駆使した研究をすすめ，乱流構造理論に高い成果を収められた．その論文は60年代の気象集誌を飾り，国内を越え，外国の研究者の注目するところとなった．その成果は「接地気層の乱流構造に関する研究」として日本気象学会賞に輝いた．故人の研究成果については，日本風工学会も賞を贈呈し，後に名誉会員の称号も贈っていることを付記せねばならない．また，故人と交流のあった米国気象局の研究者の語るところでは，氏の訪問滞在は，同研究所の研究活動に刺激を与えたとのことであった．論文講読会の成果の現れであろう．

大戦後の経済産業の興隆は日本の各地で大気環境の悪化や健康被害の不安をもたらし，その保全のための気象技術の応用が期待されていた．大気環境保全の責務を負う組織は，下層大気の乱流構造について専門家による指導や助言を求めた．故人は公務のかたわら，公的機関の組織する審議会，たとえば中央公害対策審議会や資源エネルギー庁の環境審査会，また原子力安全委員会などが行う技術的検討会の委員を積極的に務め，下層大気の乱流拡散問題の解決に多大な実績を残された．本学会はこれらの功績を併せ，「大気境界層および大気汚染気象の研究発展に貢献した功績」を讃えて，藤原賞を贈った．

また，故人は本学会の常任理事を，第15期から2期を除き第28期までの長きにわたって務められた．その間いくつもの事業を担当されたが，7期にわたって気象研究ノート担当を引き受けられ，会員の研究活動の指導と支援にあたってこられた．

思えば故人の交友は広く，青年婦人層まで多くの会員と交誼を結ばれていた．その明朗で洒脱な人柄は，常に会員交流の場を和やかにしていた．こころからご冥福を祈りたい．

（原田　朗）

© 2010　日本気象学会